

天理大學附屬天理參考館

「館藏資料から見る 神仙思想と道教」展報告

中尾徳仁
山田明廣

一、開催の経緯と展覧會の概要

二〇二二年の七月十三日から九月五日にかけて、筆者（中尾）が所屬する天理大學附屬天理參考館（奈良縣天理市、以下「當館」と呼稱）にて第九十回企画展「館藏資料から見る 神仙思想と道教」を開催した。當館は、故・窪徳忠氏（東京大學名誉教授）より寄贈されたものを含む道教関連資料、および中華圏の民間信仰関連の資料を多數所藏している。筆者はこれらに着目し、奈良行

博氏（大阪藝術大學）や共著者である山田明廣氏をはじめとする研究者の教示を受けつつ整理を續けてきた。また筆者は以前より、専門の研究者以外は「道教」という信仰になじみがなく、あまり認知もされていないのではないかと感じていた。そこで當館が所藏する實物資料を公開することにより、一般の方々の道教や神仙思想に対する理解を深めたいと考えた。その後およそ五年の準備期間を経て、本展を開催するに至った。

二〇〇〇年以降に國內で開催された大規模な道教の展

覽會として「道教の美術 TAOISM ART」展（二〇〇九年七月～二〇一〇年三月 三井記念美術館・大阪市立美術館・長崎歴史文化博物館）が挙げられる^①。上記は、中國漢代から現在までの道教関連資料數百點を展示した特別展で、多くの道教研究者が共同執筆した大部のカタログ^②が刊行された。ただし、當館は展示室の面積や豫算などに制限があるため、大がかりな企畫展の開催は難しい。そこで今回は、他施設からの資料貸借を行うことはせず、當館と天理大學附屬天理圖書館（以下、天理圖書館）の所藏品を中心に展示した。併せて、展示資料の一部を掲載した十二頁の圖録を作成し、來館者の理解に資した。

二、展示資料の紹介

本展では、道教のルーツの一つとされる「神仙思想」、道士などが目指す「不老長生」、不老長生を實現するために行う「儀禮」、さらに「道教や民間信仰の神々」という四つのコーナーに分けて約七十點の資料を展示した。これらと共に、山田明廣氏および志賀市子氏（茨城キリ

スト教大學）より提供を受けた道士や法師の儀禮などに關する寫眞を揭示し、來館者の理解を深める一助とした。なお前述の通り、本展のねらいは一般の方々の道教や神仙思想に對する理解を深めることであった。そこで展示の際には専門用語の記述を控えて、できるだけ平易な説明（キャプション）を附けることを心がけた。以下、コーナーごとに主な展示資料を紹介したい。

①「神仙思想」コーナー

ここでは、「神仙思想における世界觀」、「神仙と靈獸」、「鏡の中に現れる神仙と靈獸」に關連するものを中心に、以下のような資料を展示した。

○「神仙思想における世界觀」關連資料

青銅禽龜飾博山爐（前漢）、尙方方格規矩四神鏡（後漢）、青磁神亭壺（吳から西晉）など

○「神仙と靈獸」關連資料

押型西王母射人騎空心磚（前漢）、彩畫神人怪獸空心磚（前漢と推定）、青銅連環飾金具（漢代）、青磁僻邪（西晉）、灰陶加彩鎮墓獸（北齊）など

○「鏡の中に現れる神仙と靈獸」関連資料

重列式神獸鏡（三國）、唐草十二支文鏡（隋）、十二支四鳳鏡（唐）など

②「不老長生」コーナー

ここでは「西王母」と「神仙」に関連するものを中心に、以下のような資料を展示した。

○「西王母」関連資料

桃形の杓文字（臺南、二十世紀初期）、兎兒爺（北京、二十世紀前半）など

○「仙人」関連資料

含蟬（漢）、財子壽燈座（臺灣、十九世紀後期）、八仙の剪纸（中國大陸、二十世紀中期）、抱朴子（清前期、天理圖書館藏品）など

③「儀禮」コーナー

ここでは、道士や法師、童乩などの靈媒が各種儀禮や祭典時に使用する法器や經典、扶鸞の道具などを中心に、以下のような資料を展示した。

四神十二支文鎮臺石（唐から宋）、雷令符（臺北、二

十世紀中期）、網巾（臺北、二十世紀中期）、奉旨（臺北、二十世紀中期）、七星劍（地域・蒐集時期不明）、龍角（臺北、二十世紀中期）、笞（臺灣、二十世紀）、帝鐘（臺灣、二十世紀中期）、道士の衣装（中國大陸、現代）、法鞭（臺北、二十世紀中期）、沙魚劍（地域・時代不明）、乩筆（臺灣、二十世紀後期）、王爺の神轎（臺南、十九世紀後期）、九天應元雷聲普化天尊說玉樞寶經（紙本版本彩色）（中國大陸、一五二七年、天理圖書館藏品、七月十三日から八月十二日まで展示）、九天應元雷聲普化天尊說玉樞寶經（紙本版本）（朝鮮半島、一五七〇年、天理圖書館藏品、八月十八日から九月五日まで展示）など

④「道教や民間信仰の神々」コーナー

ここでは、道教および民間信仰の神々の神像と神像圖などを中心に、以下のような資料を展示した。

神像「周倉・關羽・關平」（臺灣、二十世紀中期）、神像「千里眼・媽祖・順風耳」（臺灣、二十世紀中期）、神像「范將軍・城隍神・謝將軍」（臺灣、二十世紀中

期)、神像「保生大帝」(臺灣、二十世紀中期)、神像「中壇元帥」(臺灣、二十世紀前期)、神像「土地神」(臺灣、二十世紀中期)、神像圖「上關下財」(天津、二十世紀前期) など

以上の展示に併せて、雷令符や七星劍、乩筆などの法器が儀禮や各種活動の中でどのように使用されるのかを示すため、二つの関連動畫を上映した。一つは、山田明廣氏より提供を受けた、臺灣の紅頭道士による「敕水禁壇」科儀の動畫である。こちらは、二〇〇五年に臺北市松山にある慈惠堂にて舉行された七朝慶成醮典の一部で、高位の神々に謁見する前の「破穢淨壇の儀式」を撮影したものである。もう一つは、志賀市子氏より提供された中國の降靈術「扶鸞」の動畫で、二〇〇九年に廣東省惠來縣の成德善堂で撮影されたものである。いずれの動畫にも日本語の解説字幕を新たに附與し、七分程度の番組に再編集して上映した。

これらの展示資料の中で最も反響が大きかったのは、王爺の神輦であらう。本品は、筆者(中尾)自身、解説

のためのイベント(後述三―④マンデートーク「王爺の神輦」)を開催するなど特に注力していたものである。日本國內のみならず、臺灣からtwitterによる情報発信があるなど、主に一般の方から注目された。また、當館ではなく天理圖書館の所藏品だが、九天應元雷聲普化天尊說玉樞寶經は、明の嘉靖年間(一五二七年)に中國で制作された多色刷り版本で、且つ十三年ぶりの實物展示であることから、特に研究者の間で反響が大きかったようである。

三、講演會と関連イベント

本展開催期間中に、①―④の各種講演會を実施した。

それぞれのタイトルと講師名、概要は以下の通りである。

①記念講演會「中國考古資料に表現された神仙世界」

(七月十六日)

講師…青木智史氏(奈良教育大學)

概要…天理參考館が所藏する青銅禽龜飾博山爐や重列式神獸鏡などの考古美術資料を例に挙げ、各資

料から読み取れる神仙思想の内容について紹介した。

②記念講演會「道教の不可思議な世界―仙人から疫病拂いの儀式まで―」（八月二十八日）

講師…山田明廣氏（奈良學園大學）

概要…道教に見られる不可思議な要素のうち、神仙思想と神仙になるための煉丹術、および罪を減し功徳を積むことで仙人になろうとする齋醮儀禮、中でもとりわけ現在の疫病拂いの儀式について見ていくことで、道士が仙人になる方法について概観した。

③トーク・サンコーカン（講演會）「道教の儀禮用具と神像―當館所藏資料を中心に―」（八月八日）

講師…中尾徳仁（天理參考館）

概要…道教の儀禮と神々についての概略を説明し、さらに道士や法師が儀禮の際に使う法具、および道教や民間信仰の神像や神像圖について、當館所藏資料を例に挙げて紹介した。

④マંデートーク「王爺の神轎」（九月五日）

講師…中尾徳仁（天理參考館）

概要…展示資料のひとつである「王爺の神轎」を詳しく解説した。まず王爺と神轎を使用する儀禮「代天巡狩」について話し、續いて神轎の周圍に彫られた精緻な木彫細工が『三國志演義』の一場面などを表現していることについて説明した。

以上の講演會の他に、奈良縣の大峯山は修驗道の主要道場の一つであり、修驗道は神仙思想の影響を一部受けたとする説もあることから、本展に併せて「山伏の装束」と「法螺貝」を展示した（七月二十六日～三十日）。なお、これらは當館の所藏品ではなく、大峯山麓にある修驗道用具店「西浦清六本舗」（奈良縣天川村洞川）より特別に借用した資料である。

四、おわりに

以上、「神仙思想と道教」展について、開催までの経

緯や展示品、および記念講演會やイベントについて報告した。ここでは展覽會の概況や今後の計畫などについて言及し、本稿の締めくくりとしたい。

本展は、天理市・天理市教育委員會・歴史街道推進協議會の後援、および日本道教學會・道教文化研究會・東アジア恠異學會・西浦清六本舗・天理圖書館の協力を得て實施した。期間中の入館者は八六八四名であった。ただし七月末から八月末にかけて、本展とは無關係の子供向けイベントを同時開催したこともあり、來館者全員が企畫展を觀覽したとは限らない。しかしそれを考慮に入れても豫想を大幅に上回る盛況で、道教や神仙思想に對する關心の高さがうかがえた。また一般の來館者に加えて、日本道教學會の會員をはじめとする研究者の方々にも多數お越しいただいた。なお開催時期は未定だが、數年後に天理ギャラリー（東京都千代田區神田錦町）において同様の企畫展を豫定している。

最後になったが、本展の開催に關して當學會および道教研究者の皆様より多大なる御助力・御協力をいただいた

た。この場を借りて御禮を申し上げたい。

註

(1) 「道教の美術 TAOISM ART」展については、田中文雄「道教の美術」特別展（東京・大阪・長崎）（『東方宗教』第一一六號、日本道教學會、二〇一〇年）において報告がなされている。

(2) 大阪市立美術館『道教の美術 TAOISM ART』（二〇〇九年、讀賣新聞社）